らのべけん
#13
もっとも冴えた3つのお題編
著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

らのけんってどんなお話?

三郷(みさと)学園高校「ライトノベル研究部」――通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを目的とした志(こころざし)の高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまったり系日常部活コメディなのです!

緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。

白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。覆面ラノベ作家一条れんとしても活躍中!

赤城操

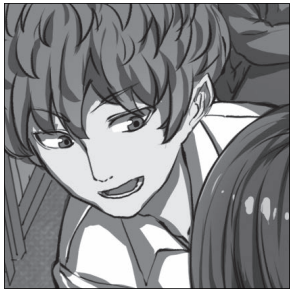
クールビューティーな眼鏡っ子。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。校正能力もプロ並み。

黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦労は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。

紺野司

ラノベ作家としての華子、つまり一条れんを担当する編集者。AG文庫編集部に所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。

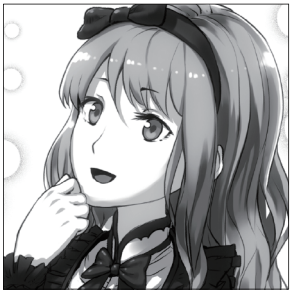


青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

白井咲耶

華子の弟であり、かつ男の娘。見た目は華子そっくりでまるで双子のよう。
※ただしサイズは全然違う模様。



蔵内豪三郎

本名は蔵内・マリアンヌ・葉子。華子のデビュー作まんみーのイラストを担当するイラストレーター。華子にやや危険な方向の好意を抱いている御様子……?

「はいはいはい、みなさん注目でーす！　今日はなんと三題噺をやっちゃいま～す♪」
放課後のらのけん部室に華子の、ゆるりとした声が響く。
「さんだい……ばなし……？」
萌が初めて聞いた単語に小首を傾げる。
「えーっとね、三題噺っていうのはもともと落語でやられてたものなんだけど～、内容的にはお客さんに適当に3つお題をもらって、それを使って即興で噺を創ることなんだよ！」
「へぇ～」
「例えば、桜・宇宙船・マグマ、ってお題をもらったらその3つの単語を組み込んで噺を創るっていうわけ～」
「へぇ～、難しそうだけど楽しそうだね～」
華子の解説に萌が感心する。
「そういうわけで今から3つ適当にお題を決めて即興で掌編を書きましょう！　物語創りの力もつくし、楽しいし、一石二鳥だよ！」
「ふーん、面白そうだからやってみようぜ～」
先ほどまで文庫本に目を落としていた一斗も興味ありげに華子の提案に乗ってきた。
「で、肝心のお題はどう決めるのですか？　白井先生」
部室奥のＰＣに向かいながら黙々と原稿（というか設定資料）を打ち込んでいた操が華子

に静かに尋ねてくる。
「ふっふ～ん、それなら準備は万端なのです～……うんしょっと……じゃっじゃ～ん！」
華子が得意げに部室のテーブルの下から何かを取り出した。
それは年末の商店街で行われる福引きで使われるガラガラだった。
あの回すといろんな色の玉が出てくるやつ。正式名称は知らない。
「駅前商店街の熊八さんが、古くなって処分するんだけど、華ちゃんが欲しければあげるよ、って言われてもらってきたんだ～♪」
本当に商店街のやつだった!?
「んで、昨日玉にお題を書いて入れといたから早速引くね～♪　えいっ♪」
そう言うと華子はぐるぐるとガラガラを回し始めた。
うきうきと楽しそうに腰を振っていたりする。超ノリノリである。
やがてジャラジャラジャラ……カラーン！　という景気の良い音と共に赤い玉が飛び出して来た。
「えーっと……最初のお題は『野菜』！」
華子が満面の笑みで玉に書かれたお題を読み上げる。
「ねーねー、華ちゃん、この場合『野菜』だったらなんでもいいの？　たとえばきゅうりとか大根でも？」

「だめで～す！　正確に『野菜』という言葉を使って物語を創ってくださーい！　じゃ、次いきまーす！」
ジャラジャラジャラ……カラーン！
「えーと次は……『にんにく』です！」
「……にんにくも野菜じゃね？」
一斗が真顔で冷静に突っ込む。
「た、確かに意味合いが近い言葉だと三題噺っぽくなりませんね……本当は意外な組み合わせの言葉がいいんですけど～……あ、でも次！　次がありますから！　最後の言葉を見てみましょう！」
ジャラジャラジャラ……カラーン！
「……」
「華ちゃん？」
出てきた玉をじっと見ながらフリーズする華子。
萌が後ろから華子の手許を覗き込む。
「『アブラマシマシ』……？」
……この3つのお題だと物語のシチュエーションがかなりせばまる気がします……というか、きっと一択です……。

「もっかいです！　もっかい最初からやり直しまーす！」
　ググダなお題を引き当ててしまった華子は気を取り直して、もう一度元気にガラガラを回し始めた。
　ジャラジャラジャラ……カラーン！
『牛丼』『つゆだく』『ねぎヌキ』
　ジャラジャラジャラ……カラーン！
『ビーフステーキ』『ミディアムレア』『春の香草を添えて』
　ジャラジャラジャラ……カラーン！
『シェフの』『気まぐれ』『ランチ』

「……華ちゃん、このガラガラ食べ物のお題しか入れてないの？」
「そ、そんなことないです！　むしろ食べ物系は抑えめに入れたんですけど……ですけど～！　……やっぱりガラガラが古いと出玉も偏っちゃうのかしら～？」
　ちょっと涙目になった華子がガラガラをぽんぽんと叩いてみる。
「さすがにそんなことはないっしょ～。よし、華ちゃん、俺に貸してみ」
　一斗が華子に代わってガラガラを回し始めようとした時。

「どーも！『ラーメン四郎』です！　ご注文の特製ラーメン野菜にんにくアブラマシマシお持ちしましたー！」
　部室の扉が勢いよく開いて出前持ちのお兄ちゃんが飛び込んできた。
「じゃ、ここ置いときますね～。器は明日回収しますんでドアの外に出しといてください！」
「え？　あの、あたしこんなの頼んでないですけど……」
「あ！　お代はもういただいてますから大丈夫です！　じゃ、毎度あり～！」
　おろおろする華子にまったく構うことなく、出前のお兄ちゃんはそのまま去っていってしまった。
「どういうこと、華ちゃん？」
「どっか別のところの注文と間違えてるんじゃないでしょうか……？」
「間違うって、普通の家と、このらのけん部室とを？」
「そうですよね～、おかしいですよね～」
　華子が首をひねったその時。
「まいどー！　吉々野家でーす！　ご注文の牛丼・つゆだく・ねぎヌキお持ちしましたー！」
「まいどー！　レストラン四季でーす！　ご注文の『ビーフステーキ・ミディアムレア、春の香草を添えて』と『シェフの気まぐれランチ』お持ちしましたー！」
「「ええええ!?」」

珍客万来に華子と萌と一斗が目を丸くする。

「「お代はもういただいてありますんで大丈夫です！　毎度ありー！」」

言うが早いか出前のお兄ちゃん達はそのまま部室を出て校外へと消えていった。

「これって……もしかして……」

萌が困惑した表情を浮かべながらガラガラに視線を向ける。

「ガラガラから出た玉に書かれたことが現実化してる……ってこと？」

「あははは、まさか、そんなー……」

萌の発言を柔らかに否定する華子だったが、やはり一抹の疑念は拭えない。

華子は改めて畏怖の念を持ちつつ、じっとガラガラを見つめる。

古ぼけているだけで、やはり普通のガラガラにしか見えないが……。

「長く使われた古い物に霊魂が宿って付喪神となる……という話はそんなに珍しいものじゃないですね。日本各所に民間伝承が残っているぐらいですから」

操が眼鏡をきらりと光らせる。

「じゃ、本当に……」

華子がびくりと肩を震わせたその時。

「おおー！　なんだこれ！　すげえ美味そうじゃん！」

一人遅れて部室に入ってきた美玖がテーブルの上に並んだラーメン、牛丼、ステーキ、ランチを見て歓喜の声をあげる。

「今日早弁しちゃったからお腹減ってたんだよね～。んじゃ、早速いただきまーす！」

「あ、ちょっと待ってください、黒田さーん！」

華子の制止もきかずに美玖はずるずるとラーメンを啜り始める。

「くっー！　やっぱり四郎は野菜にんにくアブラマシマシに限るよな～♪」

あっという間にラーメンを完食すると、美玖はステーキに手をかけようとする。

「ちょっと待って！　本当に待ってください、黒田さん！」

華子が美玖からステーキの皿をとりあげる。

「何すんのよ、華ちゃん!!　早く食べないと冷めちゃうでしょ～！」

「これを食べたら付喪神の呪いがかかってしまうかもしれないですよ!?」

「は？　ツクモガミ？　呪い？」

ぽかんと口を開ける美玖に、華子がこれまでのいきさつを簡単に説明する。

「へぇ～そうなんだ～。……面白そうじゃん！　あたしにもそのガラガラ回させてよ！」

「黒田さん、あたしの話ちゃんと聞いてました!?　だからそのガラガラを回すと大変なことに……って、ああっ!?」

ジャラジャラジャラ……カラーン！

華子が止めるのも聞かずに美玖が勢いよくガラガラを回して玉を出した。

「な、なんてことを……！」
華子が慌てて出玉をつかむ。
そしてそこに書いてあるお題を確認した瞬間、華子の顔色がさっと変わった。
果たしてそこに書かれていたお題とは……。

『白井華子』『暁に死す』

「……皆さん、長い間お世話になりました……」
「「華ちゃん!?」」
永遠に続くかと思われた沈黙のあと、華子は床の上に正座して深々と頭を下げた。しかも三つ指をついていたりする。
「皆さんと過ごした楽しい時間、あたし絶対忘れません！　死んでも忘れません！　死んでも……っていうか、あたし死んじゃうの～!?　本当に死んじゃうの～!?」
涙目でパニクる華子をらのけん部員たちが戸惑いながら見つめている。
「あははは、ば、ばかだなあ、華ちゃん！　こんなの当たりっこないって～当たりっこないよ～、ねぇ～?」
「でもでもでも、さっきの出玉は全部出前されてきましたよ!?　全部現実化しましたよ!?　もう、だめです、あたしは明日の暁……つまり夜明けには死んじゃうんです～！　死んじゃうんですよ～!!」
さすがに少しは罪悪感があるのか、美玖が無理矢理笑顔を作って華子をなぐさめるが、当の本人はもうとりつくしまもない状態だ。
「ねえねえ操ちゃん、なんとかガラガラの呪いを解く方法ってないのかしら?」
萌が深刻な顔をして操に問いかける。
対する操は、ふむ、と小さく息をついてアゴに指を当てた。
「呪いの元凶……つまりそのガラガラの持つ怨念の根源が判ればあるいは祓う手立てもあるかもしれませんが……これぱっかりは調べてみないと判りませんね……それも明日の夜明けまでに間に合うかどうか……」
「そもそも、なんで自分の名前なんかお題に入れちゃったんだよ、華ちゃん?」
一斗がちょっと困ったような表情で華子に問いかける。
「……みんなの名前が入ってます……」
「え?」
「自分の名前がお題で出てきたら楽しいかな～って思ってここにいる全員の名前を入れてあるんですぅ～」
華子が鼻をぐすぐすさせながら応える。

「……でも、それで良かったのかもしれません……」
不意に華子が静かにそう呟いた。
「華ちゃん？」
「死ぬのが青山くんでも、緑川さんでも、黒田さんでも、赤城さんでもなくて……あたしで……良かったです……生徒を守って死ねるなら……それは教師の本懐です……！」
涙で体を震わせながらも、しかし、華子ははっきりとそう言い切った。
……守るというか、そういう事態じゃないんじゃないかという気が激しくしたが、萌たちはあえて黙っていた……。
「そうと決まれば、早速お別れの会をしましょう！　残された時間を悔いのないように過ご……」

モンスター～♪　モンスター～♪　キミはモンスターペアレンツ～♪

突然華子のスマホの着メロが響き出した。
慌てて華子がスマホを取り出すと、その画面には「ひえちゃん」、つまり氷川英子という華子の親友の名前が表示されていた。ちなみに英子は駆け出しの新人声優でもある。
『あ、もしもし華子？　突然で悪いんだけどさ、ひとつお願いがあるんだ～』

「ひえちゃん……」
『あのさ～、あたし、今インディーズレーベルでドラマCD作ってるんだけど、そこに華子の声がぴったり合うキャラがいるんだよね！　だからさ、ちょっと出演してみない？　ね？　そんなに台詞も多くないし、あたしもちゃんとサポートするから大丈夫だって！』
「ひえちゃん、ごめん……あのね、あたし……」
沈痛な面持ちで電話する華子。
そう。いつもの華子ならノリノリでOKするような話なのだが、何しろ華子は明日死んでしまうのだ。受けられるわけがない。
だがそんな事情を露も知らない英子はどんどんと会話を進めていってしまう。
『でね、そのドラマCDがさ、『暁に死す』っていうタイトルのSF西部劇なんだけど、めっちゃ面白いの！　華子も脚本読んだら絶対気に入ると思うんだ！』
「……そうなの……あたし……あたし、暁に死んじゃうの……」
『は？』
「あたし、あたし……死んじゃうの……死んじゃ……うわぁ～ん～～!!」
そのとき萌は、スマホ片手に号泣しだした華子の足許に白い玉が転がっていることに気がついた。先ほど美玖がガラガラを回したときに、もうひとつ玉が出ていたようだ。
そしてそれを拾った瞬間、萌がぱっと顔を輝かせた。

『ちょ⁉　華子、落ち着いて⁉　どうしたの⁉　なんで急に泣き出しちゃってんの⁉　それに死ぬってどういうこと⁉』

「だから……ひっく、ひっく……あたし……ひっく、ひっく……明日で、もう……ひっく、ひっく……ひえちゃん、今までありがとう……あたし、忘れない！　忘れないから～‼」

鼻をすすりながら切れ切れに喋る華子だったが取り乱しすぎていて、英子にはまったく意味が判らない。

そんな華子の前に、萌がにこやかに三つの玉を差し出した。先ほど美玖がガラガラで出した玉、すべてだ。そしてそこにあったのは……

『白井華子』『暁に死す』『出演』

だった‼

「……！」

しばらく萌の差し出した玉を凝視していた華子だったが、やがてその意味するところを理解すると飛びつくように萌に抱きついた。

「あたし、死なないんですね⁉　あたし、死なないんですね、緑川さん⁉」

「そうだよ、華ちゃん！　華ちゃんは『暁に死す』ってドラマに出るだけなんだよ！」

「良かったぁ～！　良かったです～！」

『ちょ、華子、どうしたの？　何があったの⁉　何が良かったの⁉』

英子が電話の向こうで困惑している。

「ひえちゃん、ありがとう！　ひえちゃんは命の恩人！　命の恩人だよ～‼」

『はあ？』

「ドラマCDにも出るからね！　もうそこに出演するのはあたしの運命だったんだよ！　ありがとう！　ありがとう、ひえちゃん！」

『あ、うん、どういたしまして……？』

号泣から一転、ハイテンションに出演を快諾する華子に、英子はただただ戸惑うばかりだったのだ。

つづく

●「らのけん！」シリーズ掲載号一覧

★２０１４年

ＧＡ文庫マガジン７月24日配信号：らのけん！　2　夢の最終選考編
ＧＡ文庫マガジン９月合併配信号：らのけん！　3　はじめてのおつか……うちあわせ編
ＧＡ文庫マガジン10月27日配信号：らのけん！　4　思い切って告白しちゃうぞ編
ＧＡ文庫マガジン11月27日配信号：らのけん！　5　ペット攻めたり編
ＧＡ文庫マガジン12月25日配信号：らのけん！　6　はじめての発売日編

★２０１５年

ＧＡ文庫マガジン１月22日配信号：らのけん！　7　かんこれ、始めました編
ＧＡ文庫マガジン２月26日配信号：らのけん！　8　MISAO STRIKE BACK!!編
ＧＡ文庫マガジン３月26日配信号：らのけん！　9　はじめてのごあいさつ編
ＧＡ文庫マガジン４月24日配信号：らのけん！　10　その薔薇の名は……編
ＧＡ文庫マガジン５月28日配信号：らのけん！　11　咲耶、襲来！　編
ＧＡ文庫マガジン６月25日配信号：らのけん！　12　ライトノベルが出来るまで編
ＧＡ文庫マガジン７月23日配信号：らのけん！　13　もっとも冴えた３つのお題編